

『似てる誰かを愛せるから』

岡村孝子が唄う昔懐かしい歌謡曲の歌詞である。「あなたは私に似た誰かをいつか愛せる」という別離の歌詞だと筆者は思っていたのだが、筆者の友人は「あなたはあなた自身に似た誰かを愛せる」のだと解釈していた。なるほど、たしかに我々は自分に似たものに親近感を覚えることが多いと言われている。これにはアンコンシャスバイアス（無意識化の思い込み）の一つである類似性バイアスが働いている。会社においては自分と同じ大学の出身者や似た経歴の人を無意識に高く評価してしまう

に思う。普段システムサービスの提供を生業としておりバグの発生に戦々恐々としている筆者からすると、そのようにユーザーが結果の誤りを楽しんでいる姿には驚きすら感じるものであった。

システムからの出力結果として正確性や精緻さの要求される程度が業務内容により異なることは自明である。しかし、それでもなおコンピュータシステムのアウトプットの誤りに対してそのような寛容な反応が示されたのは興味深い。我々はアンコンシャスバイアスとして“生成AI”と従来からの“システム”を分けて考え、

数 | 理 | の | 窓

いつかあなたが AIを嫌いになる日



事例が発生しがちなため、面接や人事評価の場面では意識的に類似性バイアスを外すようにトレーニングを受けている管理職の方も多いただろう。

話は変わり、金融ITフォーカス本号にも生成AIの記事が載っているように、生成AIは瞬く間に世間の耳目を集めることに成功した。その流行り具合は過去のバズワードであるクラウドやビッグデータ等を凌ぐ勢いで、既に全体で約10%もの企業が生成AIを業務にて活用または試験的な利用を開始している*。筆者も生成AIの代表格であるChatGPTを利用しているが、少なくとも現時点で必ずしも精緻な出力結果を返すものではなく、むしろその応答の頓珍漢さを楽しむコンテンツをテレビやYoutubeなどの媒体で目にする機会が多かったよう

自然言語でのコミュニケーションが容易にとれる生成AIを類似性バイアス下で高く評価してしまっているのではないかと。無機質で正確な値を返すシステムより、少々間違っても普段使っている言葉でキャッチボールできる生成AIにより親しみを覚えてはいないだろうか。

類似性バイアスに似た反対の意味を持つ言葉として「同族嫌悪」がある。似てる誰かを愛せるが、似すぎていと違いが際立ってしまうのであろう。生成AI技術が進化してより我々との類似性が高まってくると、今は笑えるような彼らのアウトプットの瑕疵に腹を立て、嫌いになってしまう日も来るのかもしれない。（中田 貴之）

* 「まるわかり ChatGPT&生成AI」野村総合研究所 [編] 2023より引用